

エスキモー(イヌイット)

その歴史と暮らし

「エスキモー」というのは、「生肉を食う人」の意味だそうである。アルゴンキン族のインディア人が、カナダ極地に住む人びとの一部族につけた名称だという。

エスキモー自身は、自分たちのことを「イヌイット」(Inuit)と呼ぶ。「人間」という意味だ。一面氷だけの極地では、人間

といえば彼らしかいない。そこでアザラシや北極熊などと区別すべき存在として、自分たちのことをイヌイットと呼んだのであろう。

エスキモーが、氷河期にアジア大陸からベーリング海峡を渡ってきた、というのは定説になっている。今日のアラスカ沿岸に達したあと、だんだん東へ東へと移動したらしい。現在、エスキモーはソ連(シベリア)、アメリカ合衆国(アラスカ)、カナダ、デンマーク(グリーンランド)の四カ国にまたがって住んでいる。その数約十万人。そのうち、カナダには、北極海に面するユーコンおよびノースウエスト準州の沿岸、ケベック州北岸、北極海のビクトリア島やバフィン島などに、およそ二万二千人が住む。

エスキモーは、もともと、沿岸でアザラシ、セイウチ、魚、北極熊、鯨などを追って生活していた。これらの動物は、食糧だけでなく、燃料や衣服を彼らに与えてくれた。

エスキモーのある一群は、トナカイを追って内陸部へ入って行った。彼らはトナカイと湖水でとれる魚を食糧とし、鯨の脂肪の代わりに、たき木を燃料に使った。これらのエスキモーが海にでること、ほとんどなかった。

やがて、十九世紀になって、捕鯨船がカナダの北極沿岸や、当時はエスキモーが住んでいたセント・ローレンス湾以北の大西洋沿岸に現れるようになる。十九世紀の末には、エスキモーは捕鯨船との物々交換を通じて、白人のもたらす品物や食糧にかなり依存するようになり、これまでの原始的な漂流生活に変化が生じ



エスキモーは狩りがうまい。

はじめ。

またヨーロッパやアメリカ合衆国からやってきた捕鯨船が、数多くのエスキモーを雇い、エスキモーは木造の捕鯨船や銃砲、欧米の衣服、タバコなどに初めて接することになる。捕鯨船がエスキモーのいないところで操業する場合、夏の始めに何家族かのエスキモー(男も女も、そして子供たちも)を船に乗せて、秋には村に帰ってきた。越冬する場合は、船の中で暮らすか、近くの氷上で生活した。

エスキモーたちは、捕鯨船で働く代償として、肉などの食糧を支給された。男たちは、またライフルや弾薬、衣服、道具など、女たちは包丁や台所用品、針、マッチなどをもらった。男たちの中には、捕鯨船を手に入れたものもいた。

そのうち、鯨や北極熊の数は減り、エスキモーもヨーロッパ人から感染した病気で死ぬ者も多数でた。

やがて手皮商人がやってきて、エスキ

モーは自分たちが食糧、衣服、燃料に使った余りの毛皮や脂肪を、取り引きするようになる。エスキモーの生活様式はさらに変化した。

第二次世界大戦と長距離航空機の開発は、エスキモーにさらに革命的な転機をもたらす。防衛施設に付随した滑走路が各地に作られ、気象台やレーダー通信網が設置されて、北極の孤立はやぶられた。続いて、北極海周辺で天然資源の探査・開発が盛んになる。北極は一足飛びに二十世紀に突入した。

それとともに、エスキモーに対する一般の関心が高まり、政府も教育をはじめ、健康や生活の向上などに力を入れるようになる。

カナダ・エスキモーは、他のカナダ国民と全く変わらない権利を享受し、義務を負っている。選挙権、土地の所有権、税金納入の義務など、あらゆる意味で完全に市民としての地位を保障されている。

政府の政策は、エスキモーに対する機会均等をはかることであるが、多民族国家における「グループ」として、エスキモー独特の伝統や文化の保持にも力を入れている。

エスキモーは、イグルーに住み、ハスキー犬の引くソリに乗り、あるいはカヤクをこいでアザラシやセイウチを追う、というイメージが強い。しかし、こういうイメージは過去のものだ。

今日のエスキモーは、スノーモビル(雪上車)を駆って走り、モーター・ボートで沖へ出、飛行機で旅をするし、通信衛星を通じてラジオを聴き、テレビをみるといった、きわめて近代的な暮らしをしているのである。

サッカーに興じるエスキモーの子どもたち。